

発表要旨

仏典が伝える人間の「生活」——フィールド調査と「伝統的」食品加工の再現実験、並びに文献との照合を通じて
西村 直子（東北大学）

発表内容予定（キーワード: 乳製品, パーリ聖典, ヴェーダ文献）

0. 食物と人間

1. 乳製品及び乳加工に関する従来の研究

2. ヴェーダ文献及びパーリ聖典に基づく乳加工の研究（乳、酪、生酥、熟酥、醍醐の5種を中心として）

3. 新たな問題点：① *sarpis*（熟酥）、*sarpirmaṇḍa*（醍醐）の同定 ② *Divyāvadāna* が伝える加工法 ③現代インドにおける乳加工との間に見られる断絶 ④ 中国における伝承、『齊民要術』との関係——帯広畜産大学准教授教授、平田昌弘氏による再現実験

4. 文献研究の成果に基づく再現実験の結果と課題（平田昌弘氏との共同研究）

5. フィールド調査の課題と可能性

6. 人間定義の新たな次元にむけて文献研究が担うもの

人間は、食物がなければ生命活動を維持することはできない。同時に、食物を得るということは、食物の生命を奪う行為でもある。食べるということの切実さと食物を端緒とする形而上学的議論とは、仏教においては例えば四食説に辿ることができる。

また、食物を得るということの社会的側面は、戒律文献の中に見出すことができる。即ち、乞食にまつわる生活規定中、備蓄の禁止規定、残り物の取り扱いに関する規定、自生している木の実などの採取によって乞食を行わないことを禁ずる規定等である。仏教教団の出家者は、原則的に毎日必ず乞食を行い、その日の食物をその日に得なければならない。乞食は、教団出家者と教団外の一般社会で生きる人々との接点として重い意味を持つ。教団における価値観と教団外の社会における価値観とは、必ずしも一致しない。その不一致が露呈した時、仏教教団は一般社会の価値観を採用することも少なくなかったと推測される。教団外の人々からの批難を契機とした戒律制定が数多く見られるからである。仏教教団は、一般社会から完全に断絶しては存続し得なかったはずである。教団外の価値観を必要に応じて受け入れ、それによって彼らも一般社会に受け入れられてきた。その軌跡を、戒律条項の制戒因縁譚に辿ることも可能である。

彼らが何をどのように食べていたのかという問題は、彼らがどのように生き、どのような人間であろうとしたかという問題を浮かび上がらせる。その姿は時代や地域に応じて変化し、現代において「伝統」とされることがらが形作られてゆく過程にも光を当ててみる。今日の研究において古典文献学が提供する資料は枚挙にいとまがないが、一方でそれらが情報提供の十分な機会に恵まれてきたとは言えないという点において、恨みなしとしない。仏教研究におけるヴェーダ文献研究の成果が担う役割についても同様である。

仏教興起に至る社会の変遷は、仏典に先立つヴェーダ文献の伝承に跡づけられる。最古の『リグ・ヴェーダ』（B.C.1200頃編集固定）以来、インドにはバラモン、ラージャニヤ／クシャトリア、ヴァイシヤ、シュードラという4階級の存在が伝えられている。ヴェーダ文献は祭官階級の為に編纂されたものであるが、他の3階級への言及も少なくない。個々の議論は、当時のヴェーダ祭式を取り巻く社会的枠組みが変動期にあったことを窺わせる。バラモンの祭式万能主義に対するアンチテーゼから沙門（自由思想家）が台頭し、やがてブッダが現れる。当時のインドにおいて新たな価値観が構築されてゆく際の背景となる思想史的展開を、ヴェーダの議論は伝えている。ヴェーダから仏教興起へと至る時代の宗教や社会がダイナミックに変化してゆく過程が今後さらに明らかになれば、今日我々が新しい価値観を模索して行く上での手がかりともなることが見込まれる。